

表1【諸外国と日本の結核罹患率について】

平成30年の結核罹患率（人口10万対）は12.3であり、前年と比べ1.0ポイント減少している。日本の結核罹患率は近隣アジア諸国に比べ低い水準にあり、米国等の先進国の水準に年々近づいている。

表2【結核罹患率の都道府県別おもな順位について】

都道府県別の結核罹患率（人口10万対）は、大阪府、長崎県、兵庫県、愛知県、大分県の順に高く、山形県、宮城県、秋田県、新潟県、岩手県の順に低くなっている。大阪府の結核罹患率は20.5であり、同府の中でも大阪市の罹患率が最も高く、29.3となっている。（表2、表7 - 2）

表3【結核の死亡数及び死亡率の年次推移について】

平成30年の結核による死亡数は2,204人(概数)で、前年の2,306人に比べ102人減少している。死因順位は30位で前年と同順位だが、死亡率（人口10万対）は1.9から1.8に減少している。

表4【新登録結核患者数及び罹患率の年次推移について】

- ① 平成30年に、新たに結核患者として登録された者の数（新登録結核患者数）は15,590人で、前年より1,199人(7.1%)減少している。減少率を見ると、平成28年から平成29年にかけての減少率は4.7%（17,625人→16,789人）であることから、減少幅は2.4ポイント大きくなっている。（表4 - 1）
- ② 平成30年の罹患率（人口10万対）は12.3であり、前年の13.3より1.0(7.5%)減少している。減少率を見ると、平成28年から平成29年にかけての減少率は4.3%であることから、減少幅は3.2ポイント大きくなっている。（表4 - 1、図1）
- ③ 喀痰塗抹陽性肺結核の患者数は5,781人で、前年より578人（9.1%）減少している。（表4 - 2）
- ④ 喀痰塗抹陽性肺結核の罹患率（人口10万対）は4.6であり、前年の5.0より0.4減少している。喀痰塗抹陽性肺結核の患者が全体に占める割合は37.1%で、前年と比べて0.8ポイント減少している。（表4 - 2）

表5【年次別・年齢階級別 新登録結核患者数および潜在性結核感染症新登録者数について】

- ① 年齢階級別の新登録結核患者数では、0～14歳の小児結核は51人で前年から8人の減少となっている。10～14歳、15～19歳、20歳～29歳の若年層では患者数が増加しており、20～29歳では、前年から42人の増加となっている。その他の年齢階級では前年から患者数は減少している。減少は60～69歳で最も大きく320人の減少、次いで80～89歳で288人の減少となっている。増加傾向が続いていた90歳以上でも98人の減少となっている。各年齢階級別で全体に占める割合は、80～89歳が29.1%と最も多くなっている。90歳以上でも割合は11.6%となっており増加傾向は続いている。（表5 - 1）

- ② 年齢階級別の喀痰塗抹陽性肺結核新登録患者数は、0～14歳の小児結核は4人で前年と同数である。15歳以上の年齢層では、20～29歳では7人の増加となったが、30歳以上の各年齢階級では減少となっている。減少幅は80～89歳が138人の減少、70歳～79歳が137人の減少と高齢層での減少が大きくなっている。各年齢階級別で全体に占める割合は、80～89歳が32.1%と最も大きくなっている。（表5－2）
- ③ 平成30年に登録された小児結核患者（15歳未満）のうち、重症結核例である粟粒結核及び結核性髄膜炎患者数は各1人ずつの2人となっている。どちらの患者も0歳であった。（表5－3）
- ④ 平成30年に新たに登録された潜在性結核感染症の者の数は7,414人で、前年より159人の増加となっている。年齢階級別では、14歳以下の小児の各年齢階級と30歳以上69歳以下の各年齢階級で減少となっているが、15～19歳、20～29歳の若者層と70歳以上の高齢層では増加となっている。特に増加が大きかった年齢階級である20～29歳では159人、70～79歳では137人の増加となっている。（表5-4）
- ⑤ 新登録結核患者数に対する潜在性結核感染症新登録者数の比は、14歳以下の各年齢階級では3以上となっており、潜在性結核感染症新登録患者数の方が多くなっている。特に0～4歳、5～9歳では17以上となっている。15～19歳では比は1.0、20歳以上の各年齢階級では、いずれも1未満となっており、新登録結核患者数の方が多くなっている。（表5－5）
- ⑥ 職業別では、全体の潜在性結核感染症新登録者数に占める医療職の割合が、前年の24.6%から21.9%に減少している。一方、無職・その他が全体に占める割合が、前年の29.5%から30.6%に増加しており、平成26年の20.9%から1.5倍の増加となっている。（表5－6）
- ⑦ 外国生まれ新登録結核患者数は、前年から137人増加して1,667人となり、新登録結核患者に占める割合は10.7%となっている。新登録患者数が最も増加したのは20～29歳であり、前年から122人増加し、896人となっている。また、20～29歳の新登録結核患者における外国生まれの者の割合も前年から7.5ポイント増加し、70.4%となっている。30～39歳の外国生まれ新登録結核患者数は前年に比べて5人の減少で344人となっているが、30～39歳の新登録結核患者における外国生まれの者の割合は38.9%と前年から3.5ポイントの増加となっている。（表5－7）
- ⑧ 外国生まれ新登録結核患者のうち、入国5年以内の者は、前年の738人から144人増加し882人となっている。特に20～29歳では、前年から126人増加し、617人となっている。（表5－8）
- ⑨ 日本生まれ新登録結核患者数は、前年の14,533人から963人減少して13,570人となっている。年齢階級別では80～89歳の患者数が最も多く日本生まれ新登録結核患者の32.4%となっている。また、10～19歳の各年齢階級では、新登録結核患者数はわずかではあるが増加となっている。その他の年齢階級では前年からは減少となっており、60～69歳で減少が最も大きく前年から251人減少の1,629人となっている。（表5－9）

表6 【年次別・年齢階級別 結核罹患率について】

- ① 年齢階級別の結核罹患率は、70歳以上の高齢層で高くなっている。60～69歳の罹

患率は10.0で全体の罹患率より低い、70～79歳で19.7、80～89歳で51.2、90歳以上では82.8となっている。ただし、30歳以上の各年齢階級では年次推移は減少傾向にある。一方、20～29歳の罹患率は10.1と前年から0.3の増加となっている。(表6-1)

- ② 喀痰塗抹陽性肺結核の罹患率も、同様に、高齢層ほど高くなっている。69歳以下の各年齢階級では10未満だが、80～89歳で21.0、90歳以上では36.3となっている。(表6-2)
- ③ 新登録結核患者のうち、日本生まれの結核罹患率は、前年から0.8ポイント減少の10.9となっている。外国生まれ結核患者の影響が除かれた20～29歳の罹患率は3.1と前年から0.5の減少となっている。(表6-3)

表7 【新登録結核患者数及び結核罹患率 都道府県別・年次推移について】

- ① 都道府県別の新登録結核患者数は、47都道府県のうち7の県で増加している。新登録結核患者数が最も多いのは東京都の1,970人で、次いで大阪府の1,805人となっている。(表7-1)
- ② 都道府県別の結核罹患率は、47都道府県のうち7の県で前年から増加している。一方、結核低まん延の水準である罹患率が10を下回った都道府県の数、前年の10から大きく増加して17となっている。最も低い山形県の結核罹患率は6.0となっている。(表7-2)

表8 【年末時結核登録者数及び有病率の年次推移について】

平成30年末現在の結核登録者数は37,134人と、前年の39,670人より2,536人減少している。そのうち、活動性全結核の患者数は10,448人と、前年より649人減少している。また、平成30年末の結核有病率は、前年から0.5減少し、8.3となっている。

表9～表15 【新登録結核患者の疫学的特徴について】

<再治療者>

平成30年新登録結核患者のうちの再治療者は、前年の839人から107人減少して732人となっている。このうち、前回治療年が2000年以降の者は495人で、さらに2010年以降の者が406人と再治療者のうち55.5%となっている。(表9)

<発見の遅れ>

(ア)平成30年の新登録肺結核患者のうち有症状の者の中で、受診が遅れた(症状発現から受診までの期間が2か月以上)患者の割合は、20.6%となり、前年から0.2ポイントの減少となったが、平成14年以降では依然として高い割合となっている。このうち30～59歳の有症状喀痰塗抹陽性肺結核患者に限定すると、受診が遅れた患者の割合は34.5%となっている。(表10-1)

(イ)診断が遅れた(受診から結核の診断までの期間が1か月以上)患者の割合は、22.0%となっている。(表10-2)

(ウ)発見が遅れた(症状発現から結核の診断までの期間が3か月以上)患者の割合は、20.7%となっている。(表10-3)

< 薬剤耐性 >

平成30年の新登録肺結核培養陽性結核患者9,016人のうち、薬剤感受性検査結果が判明した者(INH、RFP両剤感受性検査結果判明者)は7,570人で、割合は84.0%となり、前年の82.4%から1.6ポイント増加となっている。このうち、多剤耐性肺結核患者数(INH,RFP両剤耐性の者)は55人で、前年より3人増加となっている。新登録肺結核培養陽性結核患者の多剤耐性結核割合は0.6%で前年の0.5%から0.1ポイント増加となっている。また、薬剤感受性検査結果が判明した者のうち、主要4剤(HRSE)全ての薬剤に対し感受性のある患者の割合は89.0%となっている。(表11)

< 糖尿病、HIV合併 >

平成30年の新登録結核患者のうち、糖尿病合併患者は2,210人で、新登録結核患者の14.2%となっている。また、HIV検査を実施した患者は1,295人で、新登録結核患者の8.3%にあたり、このうちHIV陽性は44人で、新登録結核患者の0.3%となっている。(表12)

< 医療従事者 >

(ア)平成30年の新登録結核患者のうち、看護師・保健師からの登録患者は168人で、昨年の216人から48人の減少となっている。新登録結核患者のうちの割合は1.1%と前年の1.3%から0.2ポイントの減少となっている。年齢階級別では、40～49歳の層が最も多く、前年の54人から4人増加して58人、同年齢階級新登録結核患者の5.6%となっている。(表13-1)

(イ)平成30年の新登録結核患者のうち、医師の登録患者は34人で、新登録結核患者の0.2%となっている。年齢階級別の割合では、30～59歳で、同年齢階級新登録結核患者の0.3～0.9%となっている。(表13-2)

(ウ)平成30年の新登録結核患者のうち、理学療法士、作業療法士、検査技師、放射線技師など、看護師・保健師・医師以外の者で医療機関に勤務する者の登録患者数は225人で昨年の280人から55人の減少となり、新登録結核患者のうちの割合は1.4%となっている。年齢階級別では、30～39歳における割合が最も大きく、同年齢階級新登録結核患者の6.4%となっている。(表13-3)

< 無職臨時日雇など >

平成30年の新登録結核患者のうち、登録時の年齢が20～59歳であり、登録時の職業が無職臨時日雇等であった者は869人で、昨年の878人から9人減少している。新登録結核患者のうちの割合は20.0%で前年の18.9%から1.1ポイントの増加となっている。年齢階級別での患者数は、高齢層ほど多くなっており、55～59歳では、同年齢階級の33.9%と3人に1人となっている。

また、男性の患者に占める無職臨時日雇等の者の割合は55～59歳が最も割合が大きく34.1%となっており、前年から8.2ポイント増加している。(表14-1、14-2)

< 治療成績 >

(ア)平成29年の新登録結核患者の平成30年末での治療成績は、治療成功が68.2%、死亡22.5%、失敗0.1%、脱落・中断1.6%、転出3.3%、治療中4.0%、不明0.3%となっている。60歳以上から年齢階級の上昇にともなって死亡割合が増加し、60～69歳で12.0%、70～79歳で19.6%、80～89歳で36.8%、90歳以上で54.2%となっている。死亡の影響が少ない59歳以下の年齢階級の治療成功割

合は78.4%～90.0%となっている。脱落・中断は50～59歳で最も高く2.3%となっている。（表15-1）

(イ)平成29年の新登録再治療結核患者の平成30年末での治療成績は、治療成功が68.7%、死亡17.7%、失敗0.1%、脱落・中断3.8%、転出2.3%、治療中7.1%、不明0.4%となっており、死亡の割合は全体よりも低くなっているものの脱落・中断が多くなっている。（表15-2）

(ウ)平成29年の潜在性結核感染症新登録者のうち治療を開始した者の平成30年末での治療完了率は85.5%となっている。脱落・中断は7.9%となっているが、中高年齢層では高く50～59歳では11.6%、60～69歳で9.6%となっている。（表15-3）

(工)平成28年の新登録結核患者で多剤耐性結核患者の平成30年末での治療成績は、対象56人のうち治療成功51.8%、死亡19.6%、失敗0.0%、脱落・中断12.5%、転出8.9%、治療中3.6%、不明3.6%となっている。（表15-4）